

アダム・スミスの蔵書

水 田 洋

一橋大学社会科学古典資料センター

Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

目 次

I 蔵書の形成.....	1
II 蔵書の散佚.....	11
III 蔵書の記録.....	17
IV 蔵書の分析.....	22

アダム・スミスの蔵書

水 田 洋

I 蔵書の形成

ドゥーガルド・ステュアートは、アダム・スミス追悼講演のおわりで、「かれの貴重な蔵書は、その他の財産とともに、弁護士であるいとこの、デーヴィド・ダグラス氏に遺贈された」とのべたが、その蔵書の内容にはふれなかった。おなじ講演のなかで、かれが晩年のスミスの収入について、つぎのようにのべたときも、同様に、内容にはたちいっていない。「かれのあたらしい職務〔関税委員〕がもたらした収入は、それまでのかれの境遇がゆるしたよりもずっとおおきな程度で、かれのうまれながらの性向である慈愛を、満足させることを可能にした。そして、かれが死んだときの資金の状態を、かれのひじょうにつつましい生活規模とくらべると、かれのほしい知人たちがしばしばそうではないかと疑っていたとおりに、まちががなく、かれの年々のたくわえの大きな部分がひそかな慈善にあてられていたことを、確認させた。選書におけるすばらしい判断力をもってしだいに形成した、ちいさいが卓越した蔵書と、かれがつねに形式ばった招待なしに友人をよろこんでうけいれた、簡単だが心のこもったもてなしの食卓とだけが、かれ自身の出費と見なされうるものであった¹⁾。」

同時代では、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の主要執筆者とされるウィリアム・スメリーが、スミスがかれにむかって「自分は蔵書についてだけはボー beau だ」とかたったことを記録しているが²⁾、これも内容にはかかわらないし、それどころか beau とか my books とかいふことばの意味も、あまりはっきりしない³⁾。こういう状態で、後述のようなマカロクの発言まで、スミスの蔵書の内容への言及は、生前にも死後しばらくのあいだも、見あたらない。

周知のように、スミスは1756年発行の『エディンバラ評論』第2号に、当時の（主としてフランスの）学界展望を書いている。そこでとりあげられたのは、ディドロ＝ダランベールの『百科全書』、ビュフォン＝ドゥロントンの『自然誌』、プイイの『快適感情論』、ルソーの『人間不平等起源論』、ヴォルテールの『ルイ14世の世紀』と『シナの孤児』、および「全ヨーロッパで評価されている」「メタスタジオ氏の諸著作」である。ただし、ヴォルテールについては、「フランスがこれまでに生んだなかで、おそらくもっとも普遍的な天才であるヴォルテール氏は、ほとんどあらゆる種類の著作において、主としてひとつの種類のことに専念した前時代の最大の著作者に匹敵する」といって、その一例として「かれの最近の悲劇である『シナの孤児』」をあげているのだから、スミスの関心はヴォルテールの他の作品にもおよんでいたと、考えるべきであろう。

では、これらの本を、スミスは自分でもっていたのかというと、現在わかっているかぎりでのかれの蔵書のなかには、該当するものは、ほとんどないのである。スミスは1751年にグラズゴウ大学の論理学教授に任命されたので、『エディンバラ評論』時代には、大学図書館を利用できる立場にあった。しかも1753年1月から1764年1月までは、スミスは quaestor として図書館の会計責任者（したがって図書購入の責任者）であった⁴⁾。したがって、学界展望の執筆には、大学図書館を

利用したという想定が可能である。

当時の大学図書館の蔵書数は、1760年に5,643冊とされているから、たいしたものではなかったが、スミスが、1758年6月から1760年6月までに、図書館に購入させた15点のなかには、『百科全書』の最初の7巻がふくまれていた。これは、学界展望執筆の時期よりおそいので、スミスがそのときの執筆のために利用したとはいえない。意地のわるい見方をすれば、執筆の時点では読んでいなかったのかもしれない。『自然誌』は、スミスによる購入分にはふくまれていないけれども、1791年の図書館蔵書目録には初版（1749- 未完）があり、スミス自身の蔵書は1780年代の新版であるから、前者を利用したと考えられる（ただし、初版をいつ購入したかは、目録ではわからない）。

双方の蔵書目録には、メタスタジオの『詩集』9巻（1755）はあるが、ブイイはない。ルソーとヴォルテールについてみると、まずルソーはスミス蔵書に1753年ロンドン版著作集というのがあって、これはセヌリエ⁵⁾にもシオラネスク⁶⁾にもない奇妙な版なのだが、年代であきらかなように、『学芸論』ははいっているが『人間不平等起源論』も『社会契約論』もはいっていない。このほかに、『エミール』（1762）と『新エロイズ』（1761）があるけれども、学界展望の時期よりあとである（スミス蔵書中のそのほかのルソーの著作は、出版年が1755年よりあとと確認不可能）。ヴォルテールは、『ルイ14世の世紀』（1752）と『シャルルマーニュ以降の帝国年代記』（1754）が、スミス蔵書中の該当分である。図書館蔵書の方にも、ルソーの『学芸論』（1751）はあっても、ほかのものはなく、ヴォルテールは、『アンリアード』（1721）と『マホメット』（イギリス訳、1744）が、時期的に該当するにすぎない。

したがって、スミスが『エディンバラ評論』でとりあげたフランスの出版物のうち、かなりの確実さをもって、そのときスミスが利用したと推定できるのは、図書館の『自然誌』と個人所有の『ルイ14世の世紀』だけだということになる。すくなくともこの初期にかんしては、スミスが利用した本は、個人蔵書と図書館蔵書の枠の外にもあった（むしろその方がおおかった）か、あるいは、個人蔵書であって紛失したか、いずれかなのである。

スミスは『道徳感情論』の好評によって、バックルー公の大陸旅行つきそい教師を依頼されるのだが、すでに1759年10月には、グラズゴウのファウルズ書店から、46点80冊を、エディンバラのキンケイド書店経由で、バックルー家に送らせている⁷⁾。ファウルズ書店は、床屋の徒弟をしながらハチスンの講義をきいたというロバート・ファウルズ（1707-1776）が、弟のアンドルー（1712-1775）とともに、1738-40年にオクスフォードで古書をあつめ、1741年にグラズゴウで、大学附属印刷所兼書店を開業したことにはじまり、1806年にアンドルーの子の同名アンドルーが廃業するまで存続した。バックルーのためにスミスが購入を指示したのは、ギリシャ、ローマの古典であって、そのことはまず、スミス自身もその種の本を同様にして入手したことを想像させる。それだけではなく、同書店が1740年に発行したカタログは、『新着輸入書目録。ほぼすべてのギリシャ、ローマ著作者の最稀少版、同様に最高の文献学、数学、フランス、イタリア、スペインの著者のものの多数。大部分はH・ステフェンス、ヴァスコザン、トゥルネブス、コリネウス、モレル、クラモワシー、アルディ、ギュンタエ、ヴェヘルス、王立印刷所、ルーヴル、プランタン、エルセフィエル等の出版。……⁸⁾』となっているので、エルセフィエルが出版したホップズの『市民論』などが、このルートでこの時期に、スミスの手にはいったことは、十分に考えられる。スミスの蔵書のなかに、プランタン版はわずかしかなければ、エルセフィエルその他のオランダ版は、かなりあり、他方でファウルズ自身が印刷出版したものも、チャイルド、ジー、マン、タッカーなどの経済書をふくめて、1763年には450点近くになっているので、ファウルズ経由でかなりの蔵書が、グ

ラーズゴウを離れるまえのスミスの手もとにあったのではないかとおもう。そして、もし、スコットが指摘するように⁹⁾、1756-1763年には、七年戦争で貿易が杜絶していたとすれば（後述のように、全面的には信頼できない）、『道徳感情論』執筆まで、さらにはその第2版（1761）を経て大陸旅行に出発するまでのスミスの蔵書は、それ以外にはほとんどなかっただろう。もちろん、一方ではハスチンの『道徳哲学体系』（1755）のように、スミスが予約者名簿にでているばあい（これもファウルズの出版）があるし、他方では、図書館からキンケイドやミラーに支払った証拠があるので、スミスも、エディンバラとロンドンの両書店から購入したということも考えられるが、これには証拠がない。

スコットは、「あきらかに、スミスがそこ〔グラーズゴウ〕にいたときは、かれは図書館蔵書にたよっていた。のちに、カコーディで執筆していたときに、かれは、それらの本を参照する必要を感じ、自分でおなじものを買った。こうして、かれの蔵書のかかなりの部分は、かれがグラーズゴウをはなれてから形成されたと、考えていいであろう¹⁰⁾」と書いたのは、スミスがグラーズゴウ時代に重農学派の著作をしていたかどうかという問題に、否定的にこたえる前提としてであって、そういうバイアスから焦点をフランス書にしぼりすぎたために、全体像がぼけてしまった。『道徳感情論』の執筆のため、あるいは法学や修辞学・文学の講義のためでさえ、スミスはあまりフランス書を必要としなかったから、それをのぞけば、この時期に一応の蔵書をつくりあげることはできたはずである。たしかに、『百科全書』や『自然誌』については、図書館に依存したとはいえ、そのほかについては、図書館購入とならんで自分でも買ったと考えることもできる。そういうことがありえないかどうかは、図書館利用についての、個人・国民・時代の慣習によるのだから¹¹⁾、断定はできないが。まして、前にあげた4冊の経済書のように、ファウルズ発行でありながら、図書館にないものについては、この時期にスミスが購入したという推定が妥当であろう。

なお、スコットのフランス書輸入杜絶説（七年戦争による）についても、疑問がある。なぜなら、ヒュームが『道徳感情論』初版についての手紙のなかで、スミスにエルヴェシウスの『精神論』（1758）とヴォルテールの『カンディッド』（1759）を推奨しているからだ¹²⁾。前者については、ヒュームは、一読の価値があるといい、後者については詳細をしらせるといっているから、かれ自身は読んだわけであり、ロンドンでヒュームが読んだということは、グラーズゴウでもフランス書（ただし『カンディッド』の出版はジュネーヴ）が入手できたということである。もちろん、スミスがじっさいに入手したという証拠はないが、かれは1763年12月に、パリのヒュームにあてた手紙で、「私についていくらかでも知るとい名誉を与えて下さったフランスの才人たちによろしくお伝え下さい。とくに、エルヴェシウス氏に、かれが私についてなにかを知ろうと知るまいとよろしく。私の本は、私がかれの本〔『精神論』〕を読む機会をえるまえに、印刷されていて、そのために私は、他の哲学諸体系といっしょに、それに言及することができなかったのだということを、伝えて下さい¹³⁾」と書いたのだから、読んだことは確実であるし、蔵書のなかには、第2巻だけではあるが初版が残っている。

この手紙でスミスは、エルヴェシウスのまえにドルバックにも言及していて、それは『道徳感情論』のフランス訳に関係があるらしいのだが、ドルバック自身の著作は、ブーランジェの著作とされるものにかれがどれだけかわわっていたかを別にすれば、1760年末からはじまっていて、スミス蔵書のなかにあるものも、1770年代の出版であるから、ここでは問題にならない。コンドルセについても、同様である。ついでに、ほかの百科全書派についてみると、スミス蔵書のなかにあるかれらの著作で、スミスが大陸旅行にでるまえに出版されたのは、ダランベールの『音楽論』（1752）、

『文学・歴史・哲学論集』(1760-67)、コンディヤックの『人間意識起源論』(1746)、『動物論』(1755)、『感覚論』(1754)、『体系論』(1749)、ディドロの『哲学的思索』(1749)、『自然の解釈』(1759)である。大学図書館には、以上のうち、コンディヤックの『体系論』とディドロの両著のほかは、すべてはいっている。もちろん、個人蔵書はスミスが死んだ1790年まで、図書館蔵書は1791年までの記録であって、個々の本がいつ購入されたかは不明なのだから、断定的なことはなにもいえないわけだが、すくなくともスコット説に疑問を提出することはできる。

スミスは、フランス滞在中に、これらの著者と知りあったから、そのときに著書の寄贈をうけたかもしれないのだが、時期的に該当するダランベールの『フランスにおけるジェジュイットの弾圧』(1765)は、ファウルズが印刷してエディンバラのバルフォアが発行した版であるから、著者寄贈ではないだろう。そうすると、これまであげた百科全書派のなかでは、ダランベールの『論集』(5巻, 1760-67)が、かろうじてあてはまるだけである。したがって寄贈があったとしても、上記のほかは、スミスの帰国後のことでしかありえない。

しかも、寄贈本にはたいいてい、著者自筆でなくても、寄贈であることが書きこまれているのに、百科全書派の著作にはそれがないのである。これに対して、ケネーの『フィジオクラシー』は、「フランス王の第一侍医である著者ケネー氏から」とフライリーフに書きこまれているが、出版年が1767-68年なので、帰国後におくられた可能性がある。フランス滞在中という可能性を完全に否定しきれないのは、タイトルページの出版年は、かならずしも実際に本ができあがった年ではないからであり、とくにこのばあいには、スミスの帰国が1766年10月であるから、差は数か月しかない。

確実に大陸旅行中に入手したとおもわれるものは、第1に、スミスのトゥルーズ滞在中に名誉回復判決があったカラス事件について、シュードルその他によるパンフレットがあり、第2に、マンチェスタ出身のジャコバイト、ジョン・ホルカー(1719-1786)の織物技術論(1764)もそうであろう。ホルカーは、ジャコバイト反乱に参加して逮捕され、ニューゲイト刑務所からフランスへ逃亡し、フランスの製造業総監になった人物で、ルーアンに工場をもっていた¹⁴⁾。スミスがホルカーにあったということも、ルーアンを通過したということも、証拠はなにもないのだが、この本が、フランス財政の現状を論じた三篇の手稿といっしょに製本されていて、手稿がすべて1766年となっていることは、手稿というものの流通範囲を考慮すれば、あわせてフランスで入手したと推定していいであろう。第3に、1753年から65年におよぶ、70篇をこえるパルルマンの法令や建言があり、そのなかには、スミスが比較的ながく滞在したトゥルーズ(および近くのモンペリエ)についてルーアンのパルルマンのものがおおい。スミスは、トゥルーズからジュネーヴにいくときに、モンペリエを通過したことは確実だが、ルーアンも、パリから帰国するときの経由地として考えられないわけではない。いずれにせよ、これらのパルルマン書類は、フランス滞在中に入手したものであろう。なお、第4にラヴィーについて、ホルカーの場合とおなじような推定ができるのだが、後述(p. 22 注14)にゆずる。

ボナーは、ブルギニョン・ダンヴィルの地理学書および地図について、「おそらく寄贈書、ダンヴィル夫人は1766年にパリで、アダム・スミスと知りあった¹⁵⁾」と書いているが、確証がない。たしかにスミスは、旅行中に、ロシュフーコー・ダンヴィル侯夫人と知りあったが、それは1765年で、しかもジュネーヴでのことである。そして、ロシュフーコー・ダンヴィルとブルギニョン・ダンヴィルは、関係がないし、夫のジャン・バティストがまだ生きていて、アカデミー会員として活動しているのに、夫人だけがスミスと知りあったというのも、ありえないことではないけれども、やや奇妙である。そういう個人的な接触とかかわりなく、スミスが、その蔵書のなかにかなりおお

い旅行記や地理学書の一部として、ダンヴィルのものを入手したことは、自然のなりゆきだったかもしれないが、それが12点もあって出版年は1735年から1776年におよんでいるということを考えると、ボナーでなくても特殊な関係を想定したくなるだろう。ダンヴィルは一流の地理学者として知られていたから、スミスが、フランス滞在中にそれに気づいて何冊かを買い、帰国後にそのごの出版についても注意して入手につとめたと、考えられないであろうか。

著者が自分の著書を寄贈するという風習が当時存在したことは、ケネーの例でもわかるし、スミスのばあいには、『道徳感情論』についてはスミスからアンドルー・ミラーへの指示によって¹⁶⁾、『国富論』については、ヒューム、ブレア、ブラック、ロバートソン、ファーガスンなどからの手紙によって¹⁷⁾、確認できる。ヒュームもスミスに対して、『道徳・政治論集』の新版(1753)の準備中にアイディアをもとめながら、「もし君がまえの版をもっていないならば、一冊送ろう」と書いた¹⁸⁾。この手紙は、ヒュームからスミスへの手紙としては、現存するかぎりでは最初のものであるから、それ以前にヒュームが著書を送っていたという証拠はないし、この文面ではむしろ反対のことが推定されるのだが、以後については、たとえば、1757年3月のスミスあての手紙には、「ぼくは近ごろロンドンで出版されたぼくの『論集四篇 *Four Dissertations*』を数部手にいれたので、いちばん早いグラズゴウ貨物便で、君に一冊送る¹⁹⁾」と書いている。

スミス蔵書をみると、たしかに『道徳・政治論集』の方は、『諸主題論集』となったものが、「著者より」と書きこまれているが、1753年-54年の4巻本初版ではなく、1758年の1巻本新版である。1757年に送られたはずの『論集四篇』は、1781年のスミス蔵書目録(手稿)にはあるけれども、現在は行方不明である。前者については、ヒュームが手紙で、送ろうかといっているのは、まえの版であり(これは1741年版が、ボナーによってエディンバラ大学所蔵とされているが、行方不明)、新版ではないのだから、蔵書と手紙とのあいだに矛盾はない。ヒュームがただ、『諸主題』が出たときに寄贈するのをわすれて、つぎの版を送ったと考えればいいのである。ヒュームのほかの、スコットランド啓蒙のリーダーたちについてみると、かれらがスミスに著書を送ったという証拠はない。そういうことにふれた手紙が残っていないし、スミス蔵書中のそれらの著書には、著者の自署はもとより、ケネーについてまえにのべたような「著者より」という書きこみ(これは受領者側のものだが、スミスの自筆とはかぎらない)もないのである。このことは、ケイムズのように、『良俗と自然宗教の諸原理』の第3版について、スミスを批判した手稿を送って意見をもとめているという例があることを考えると²⁰⁾、奇妙な感じをぬぐいきれない。スミス蔵書のなかのケイムズの著書にも、寄贈を示す書きこみはないのである。スミスの側でのミスと考えればいいのだろうか。

スミス蔵書のなかの著者寄贈本は、ケネー、ヒューム、テュルゴからのものをふくめて10点ぐらいだが、その大部分は、『国富論』が出てからであり、この三人とマサチューセツ総督パウヌルをのぞけば、スミスより若い世代の著者である。それらは、スミスの影響力の指標として重要であるが、時期的にはここでとりあげるべきことではない。ただいまとりあげている大陸旅行前のスミスとの関連でいえば、その当時のスミス、すなわち『道徳感情論』の著者としてのスミスの名声は、たしかにモスクワ、ジュネーヴから留学生をひきよせ、フランスでは三つも翻訳がでるほどであったが、国内ではタウンゼンドやシェルバーンがバックルやフィツモリスの教師として注目するようになったとはいえ、あまり大きくなかったのではないかとおもわれる。

ここで、スミスがフランスから帰国した時点にもどると、帰国後数か月たった1767年2月12日のシェルバーンあての手紙に、スミスの蔵書が登場する²¹⁾。このときスミスはまだロンドンにいて、『国富論』のための資料をあつめていたのだろう。しかし、手紙にでてくるのは、経済書ではな

く、旅行記である。その手紙は、サミュエル・パーチャスの『旅行記』のなかに翻訳されたペドロ・フェルナンデス・デ・キロスの回想記を送るということから書きはじめられていて、パーチャスの本は、スミス蔵書のなかにあることが確認されているのである。この手紙には、続いてアリグザンダ・ダルリンプルの「多数の論文 papers を通読した」とあるので、やがて出版されるかれの航海記（1767, 1769）も、スミス蔵書にふくまれることを期待させられるが、現在までのところでは、その期待にこたえる証拠はない²²⁾。

しかし、それからひと月あまりたった1767年3月25日に、かれの著書の出版者のひとりであるトマス・カデルあての手紙は、フランスからもちかえった本の、エディンバラへの輸送の依頼と、ふたつの経済書の入手依頼である。「あなたがすでに、私に関してお骨折り下さったことに、心からお礼を申しあげるとともに、さらにいささかのお骨折をねがわなければなりません。それは、あなたが四つの箱のすべてを、できるだけ早く、キンケイド氏気付でエディンバラに送って下さるだけでなく、それに200ポンドの保険をかけて下さること、そして、あなたが最近ご親切に私のために入手して下さいた二冊の本、すなわちアングラスとポスルスウェイトをふくめた、すべての費用の計算書を、できるだけ早く送って下さることです²³⁾。」この四箱が、スミスが大陸旅行中および帰国後ロンドン滞在中に入手した本であろうということは、出版者から出版者へ輸送を依頼したことから推定するだけであるが、あるいは「最近の二冊の本」ということばが、そのまえの四箱も本であることを、前提しているとも考えることもできよう。

1767年6月にカコーディに帰ってきて、『国富論』を書きはじめたスミスが、ヘイルズ卿に対して、食料品価格史についての資料を借りたことへの感謝につけくわえて、「私は、フリートウッド、デュプレ・ドゥ・サン・モール、穀物政策〔エルベール〕、メッサンスの人口および穀物価格論、小麦商業論〔チャールズ・スミス〕などのような印刷書を、かなりもっています²⁴⁾」と書いたのは、例の四箱の内容の一端を示すといえないだろうか。これらはすべて、蔵書のなかにある。

カコーディで『国富論』執筆中のスミスについてみると、1769年1月から5月までの、ヘイルズとの往復書簡（前掲のものをふくむ）は、スミスの関心が、法定価格を中心とした法制史・価格史にあったことを示す。スミスは、すでに（まえに引用したような）資料を手もとにもっていたので、ヘイルズから助言をうけてはいるが、なにかあらたに購入した形跡はない。むしろこれらの手紙からわかるのは、スミスが、スキーンの『レギウム・マエスターテム・スコティアエ』（1613）をそのとき所有していたことである。そのほかマドックスの『イングランド王室財務局史』、イングランド議会法令、フランス王命令などがあげられ、「私はスコットランド法令集 Scots Acts を読もうとおもっています」と書かれていることから、同様の推定ができる。ただ、その手紙のおわり近くに、「あなたがスコットランド法についてのべられたことは、イングランド法についてバーリントン判事がのべていることと、ほとんどおなじ性質のもので、それはきわめてひろくうけいれられています」とあるのに、バーリントンの著書は²⁵⁾、蔵書のなかにみあたらないのである。これもまた紛失と考えるべきであろうか。

1773年2月のヒュームの手紙は、アンドルー・ステュアートの『マンズフィールド卿への手紙』（1773）とモンボドの『言語の起源』第1巻を推奨していて²⁶⁾、これは双方とも（モンボドは1773-76年刊の前半3巻）スミス蔵書にふくまれている。ウィリアム・パルトニーあての手紙で²⁷⁾、ジェイムズ・ステュアートの『経済学原理』について、「それに一度も言及することなく、そのなかのすべてのまちがった原理を、明白にきっぱりと反駁した」と書いたことはよく知られているし、『原理』は、第1巻だけではあるが、蔵書として残っている。おなじ手紙のなかに「ベンガル

における鑄貨の混乱」への関心がのべられていることからすれば、ステュアートの『ベンガル鑄貨問題に適用された貨幣の原理』（1772）も、あってよさそうだが、これはみあたらない。

1773年4月16日にスミスは、ヒュームを文筆上の遺産管理人に指定して²⁸⁾、ロンドンにむかった。ロンドンでしばらくかれは『国富論』の仕あげに日時をついやすが、そのためには、ブリティッシュ・ミュージアムの読書室も、すでに使用できたはずである。この時期には、ヒュームの論敵ビーティをプリーストリが批判して論争がはじまりそうになった。スミスのヒュームへの手紙は、リチャード・ハードがビーティに、応答の必要がないと忠告したことを残念がっている²⁹⁾。ビーティのヒューム批判はすでに1770年に出版され、1773年にロンドンでジョンソンのグループにもてはやされる。スミスにはファergusenがそのことを知らせているけれども³⁰⁾、蔵書のなかにある『真理の不変性』は2巻本となっているので、おそらく1778年のダブリン版であろう。プリーストリの本は、ビーティ、リード、オズワルドのコモン・センス哲学を批判したものなので、スミスがビーティの議論にあまり関心がなくても、これをもっているといいのだが、みあたらない。

このロンドン滞在中に、スミスはギボンとともに、ジョン・ハンターの医学講義をきいた。ウィリアム（1718-83）とジョン（1728-93）のハンター兄弟は、グラズゴウ出身の外科医で、兄はハチスン時代にグラズゴウ大学でまなんだが、活動したのはふたりとも、国外とロンドンであったから、スミスとのめぐりあいも、このときがはじめてだった。スミスは『国富論』第2版（1778）が出る直前に、ストラハンあての手紙で、寄贈先にハンターを追加するように指示している³¹⁾。スミス蔵書のなかのハンターの『人間の歯の自然史』（1771-78）や『性病論』（1786）には、「著者から」という書きこみはないけれども、そういうものとして理解していいだろう³²⁾。

『国富論』初版を契機として、1760年までマサチューセツ総督であったトマス・パウヌルの『パウヌル総督のアダム・スミス法学博士への手紙』（1776）が出版され、スミスはふたたびロンドンにでてきたときの手紙（1777年1月）で、「私がエディンバラを出発するまえの日に、あなたのお手紙というたいへんな光栄に浴しました³³⁾」とのべているのだが、これは後述のようにヴァイナーが発見するまで、スミス自身の蔵書目録にもなかった。つづいて、ヒュームの死についてスミスが書いたことにくいががった、ホーンの『友人デーヴィッド・ヒュームの生涯・死・哲学について、アダム・スミス法学博士にあてた手紙』（1778）、M. T. の『エディンバラの一紳士から、国防問題についてバックルー侯爵閣下にあてた手紙、附論、アダム・スミス博士の著書『国富論』のなかのこの主題にかんする章について』（1778）があらわれる。スミスは、前者を無視したかもしれないが、後者についてはアンドレアス・ホルトあての手紙のなかで、「この紳士は、もし私がきいている名前がただしければ、私の知人のひとりなので、私への攻撃にはほとんどおどろきませんし、そのやりかたについては、なおさらのことです³⁴⁾」と書いているのだから、あきらかに読んだのである。しかし、いずれも蔵書としてはのこっていない。おなじ手紙のなかの、ジェームズ・アンダソンの『国民産業精神振興論』（1777）についても、同様である。モロー・ドゥ・ボーモンを入手したという手紙（1778.11.24）については、後述する（p. 25 注2）。

1777年10月にはスミスはふたたびカコーディにもどって、ストラハンに、スコットランド関税委員の候補にあげられたことを告げている³⁵⁾、ひと月あとには、ギボンから、その決定をいわう手紙をうけとった³⁶⁾。翌1778年2月（任命は1月）から、死にいたる12年を、かれは主としてエディンバラで、閑職の高官としてのみならず、長老文化人としてくらすのだが、そのあいだには、かれの名声に応じて、またじっさいに出版のあっせんをしたことに対して著書の寄贈をうけた。たとえば、ロシュフーコー侯からは『箴言』の新版（1778）が贈られ³⁷⁾、ギルバート・エリオット

の女婿ウィリアム・イーデン（1744-1814、イーデン条約の締結担当者）は、自分の意向をスミスがダングラスに伝達したことに³⁸⁾感謝したためか、『カーライル伯への四篇の手紙』（1779）でスミスをはめているし、スミス蔵書のなかのこの本は、著者寄贈と考えられる。ただし、スミスが、「あなたの手紙は、あなたがあげている諸版のほかに、この狭い国〔スコットランド〕でも一版をかさねている³⁹⁾」と書いていることに該当する版はみあたらない。『感情の人』（1771）や『世故の人』（1773）の著者であるヘンリ・マケンジー（1745-1831）は、年少の友人としてスミスとしたしく、1780年にはその編集する雑誌『ミラー』への原稿を、スミスに読んでもらっている⁴⁰⁾。これらとともに、『ジュリア・ドゥ・ルビネ』も雑誌『ラウンジャー』も、すべてスミス蔵書のなかにあるのは、とうぜんであろう。

出版関係では、スミスは、ストラハンに、1783年にドーメニの牧師トマス・ロバートソンの『音楽史』（1784）、サミュエル・チャータズの説教集を⁴¹⁾、1785年にはジョン・ローガン（1748-1788）の『歴史哲学要論』（1781）を推せんし⁴²⁾、ついで同年11月から翌年はじめにかけて、ジョージ・チャーマズ（1743-1825）の『ブリテン国力の歴史的比較推定』（1782）の改訂版のために、資料を提供した⁴³⁾。1786年5月には、エディンバラ大学の哲学教授、ジョン・ブルース（1745-1826）をカデルに紹介し⁴⁴⁾ 翌年3月には、ロバート・ビートソン（1742-1818）の『大ブリテン・アイアランド史の政治的索引』（1786）の新版への助言をもとめて、かれを司教ジョン・ダグラスに紹介した⁴⁵⁾。かれらの著書は、チャータズのものをのぞいて、あきらかに著者が寄贈したものとして、現存しているが、バーンズのエディンバラ版『詩集』（1787）は、スミスが後援し、4部も予約していたのに、残存していないのである。

1787年には、スミス批判の手紙をふくむベンサム『高利の擁護』が、著者から送られてくる。これをスミスが全面的にうけいれたという話はよく知られているから、くりかえさない。ジョン・マクファーランの『国民的重要性をもつ諸主題について』（1786）と『貧民研究』（1782）がともに（後者は2部）著者寄贈となっているのは、マクファーランが、スミスの住居に密接したキャノンゲイト教会（そこにスミスの墓がある）の牧師だったという関係からであろう。だが、カゾー（1727-96）の『社会機構の多数の部分についての考察』（1785）や、コートニー（1741-1816）の『フランス革命についての哲学的省察』（1790）が、著者から寄贈されていることについては、内容的にも、交友関係からも、理由がよくわからない。

以上の寄贈本については、蔵書の内容をややたちって分析するときに、またふれることにして、さいごに、晩年のスミスが、余暇をギリシャ詩人の研究にあてていたという、ドゥーガルド・ステュアートの証言をあげておこう⁴⁶⁾。このときスミスが読んだであろうホメロス、ヘシオドスなどが、蔵書としてグラーズゴウ時代から持っていたものだったと考えておかしくはないにしても、晩年に多少の追加があったかもしれないとも考えられるからである。

なお、この時期にスミスが、本をあらたに買っていたことは、カデルにあてたつぎのような手紙で知ることができる。「私は、スコットランドに帰ってからの怠惰について、たいへん申訳なくおもいます。じつをいえば、私はロンドンで、かなり多くの本を買いました。その一半は新刊本、他方は旧刊本の新版または私にははじめての版でした。それらを読んで気ばらしをすることのたのしみが、私の本来の仕事すなわち『国富論』新版の準備から、私を誘惑してそらせたのです⁴⁷⁾。」

カデルあての別の手紙によれば、スミスはロイヤル・ソシアティの『哲学論集』の全巻をそろえようとしていたし⁴⁸⁾、またモルレの『国富論』フランス訳の入手を依頼したが、これが誤報とわかってとりけしている⁴⁹⁾。「最近ロンドンにいったとき、あなたの店でチェスタフィールドの著

作集を買いました」という記録もあるから⁵⁰⁾、スミスの蔵書形成は、晩年になっても、停止しなかったことはたしかである。

- 1) Dugald Stewart, *Biographical memoirs*, Edinburgh 1858, pp. 72 & 80-81.
- 2) William Smellie, *Literary and characteristic lives of Gregory, M.D., H. Home, Lord Kames, D. Hume, and Adam Smith, LL, D.*, Edinburgh 1800. この本は、あまり利用されたことがないし、日本にはいっているかどうか疑問である。ここでは後掲のボナー『アダム・スミス蔵書目録』初版(1894)の序文の引用による(p. viii)。ボナーは、第二版では、この引用だけでなく、スミス蔵書についてのほかの説明も述べている(たとえば量と装丁)。
- 3) my books とは、自分の著書ということかもしれないが、それはスメリーの文脈をしらべればわかるとして、beau については OED にふたつの意味があげられている。「1. 服装, 物腰, 社交的礼儀に特別の, あるいは過度の, 注意をはらう男。……ダンディ。2. 女性の同伴者または求愛者, 恋人, スイートハート。」このふたつのうち、2の意味をとれば、スミスは自分が愛書家だといったかったのだ、ということになり、じっさいにそうだったとおもわれるのだが、それでは、愛書家としてかれは本をどうあつかったのか、つぎの問題である。1の意味では、相手(本)をどうあつかうかという問題はでてこない。ボナーは、この問題にこたえて、「原則としてかれは、製本のみごとさよりも強さを目ざしていたようであり、稀覯本や善版本をさがす人ではなかった」とかいている(p. ix)。あとでのべるように、スミスの蔵書のなかには、インクナブラは一冊もないし、全体として特に版をえらんで集めたとはおもわれない。ボナーの初版から100年たっているせいもあるが、製本もとくに強固とはみえない。蔵書家としてのスミスの特色は、読んだ痕跡をのこさないこと、つまり本に書きこみをしないことしか考えられない。
- 4) スミスと大学図書館との関係については、W. R. Scott, *Adam Smith as student and professor*, Glasgow 1937, pp. 168-184. なお、時期がややずれるが、スミスの死の直後(1791)におけるグラーズゴウ大学図書館については、蔵書目録がある。*Catalogus impressorum librorum in Bibliotheca Universitatis Glasguensis, secundum literarum ordinem dispositus*. Impensis academiae, labore et studio Archibaldi Arthur, A. M. philosophiae moralis professoris. Glasgae 1791. これを編集した図書館長アーチボルド・アーサー(1744-1797)は、1758年にグラーズゴウ大学に入学、したがってスミスのもとでまなび、1780-1796年には、道徳哲学助教授(正教授はリード)、1796年にリードの後任として正教授になったが、翌年死亡した(このことをここに書いておくのは、スミスの学生たちがどうなったかを追跡する資料としてであって、蔵書とは直接に関係がない)。
- 5) Jean Sanelier, *Bibliographie générale des oeuvres de J.-J. Rousseau*, Paris 1950.
- 6) Alexandre Cioranescu, *Bibliographie de la littérature française du dix-huitième siècle*. Tome III. Paris 1969.
- 7) Adam Smith, *Correspondence* (The Glasgow edition of the works and correspondence of Adam Smith, vol. 6, 2nd ed., 1987), pp. 57-58.
- 8) Philip Gaskell, *A bibliography of the Foulis Press*, second edition, Winchester 1986, p. 65.
- 9) W. R. Scott, *op. cit.*, p. 173.
- 10) *ibid.*, p. 172.
- 11) スコットは、スミスが図書館に購入させた本を自分でも所有していたことを、「蔵書のかなりの部分が、グラーズゴウをはなれてから形成された」とこの論拠としている。*ibid.*, p. 172.
- 12) Adam Smith, *Correspondence*, p. 34. ただし、スミスはヒュームの推奨する本をすべて購入したわけではならしく、たとえば、1754年にヒュームはスミスへの手紙で、友人たちにブラックロックの『詩集』(1754)を売りさばくようにもめたが、「君自身が一冊をとって」とわざわざ書いているにもかかわらず、スミス蔵書にはそれが不在(*Correspondence*, pp. 10-11.)。もちろん、くりかえしているように、蔵書は紛失したという可能性もあるから断定はできない。あとで言及するバーンズの詩集は、紛失の例である。
- 13) Adam Smith, *Correspondence*, pp. 413-414.
- 14) *DNB*, q.v.
- 15) James Bonar, *A catalogue of the library of Adam Smith*, second edition, London 1932, p. 8.
- 16) Adam Smith, *Correspondence*, p. 39.
- 17) *ibid.*, pp. 187-194. もっとも、これらの手紙では、スミスが寄贈したのか、かれらが自分で買ったの

のかは、はっきりしない。

18) *ibid.*, p. 8. この「まえの版」(1748)は、スミス蔵書中にみあたらない。

19) *ibid.*, p. 19.

20) *ibid.*, p. 194. このケイムズの草稿(自筆ではない)とおもわれるものが、バナマン文書(したがってスミス蔵書)のなかにあって、現在はグラーズゴウ大学図書館にある。後述のように、スミス蔵書中のバナマン家所蔵分は、全部、エディンバラ大学図書館にはいったのに、バナマン文書は、おそらくスコットの調査の収穫として、グラーズゴウにあるのだ。

21) *ibid.*, pp. 122-123.

22) しかし、ダルリンプルがヘイルズの弟であり、スミス蔵書がこの種の航海記に対するかなりの関心をしめしていることからすれば、紛失と考えたくなる。

23) *ibid.*, p. 124. このときのアンダスンは、欠陥本であり、スミスはのちに、カデルあてにクレームをつけている(p. 248)。

24) *ibid.*, p. 139. 前掲ホルカーのばあいもそうだが、これらの本はすべて、スミス蔵書として確認されているので、書誌的記述はすべて、ここでは省略して蔵書目録にゆずる。

25) Daines Barrington, *Observations on the statutes chiefly from Magna Carta to the twenty-first of James the First, chap. XXVII*, London 1766.

26) Adam Smith, *Correspondence*, pp. 166-67.

27) *ibid.*, p. 164.

28) *ibid.*, p. 168.

29) *ibid.*, p. 182.

30) *ibid.*, p. 169.

31) *ibid.*, p. 230.

32) スミス蔵書のハンター『性病論』は、松戸市の日大歯学部図書館にある。その序文は、「同感について」という節からはじめられているが、内容的にスミスの同感論につながるものとしてではなく、同感という用語の普及＝流行の一例としてあげておく。

33) *ibid.*, p. 224.

34) *ibid.*, p. 251.

35) *ibid.*, p. 226.

36) *ibid.*, p. 228.

37) *ibid.*, p. 233.

38) *ibid.*, p. 239.

39) *ibid.*, p. 244.

40) *ibid.*, pp. 246-47.

41) *ibid.*, p. 269. チャータズ(1742-1825)は、グラーズゴウでのスミスの弟子であった。

42) *ibid.*, p. 285. なお、ローガンはのちに、自分が書いた『古代史論』(1788-91)を、「旧友ラザフォード」の著作といつわって、スミスの予約購読をもとめた。cf. p. 307.

43) *ibid.*, pp. 287-91.

44) *ibid.*, p. 296.

45) *ibid.*, p. 301.

46) Dugald Stewart, *Biographical memoirs*, Edinburgh 1858, p. 311. スチュアートは、晩年のスミスが、青年時代の愛読書にたちもどることをこのみ、古代ギリシャの悲劇詩人のものを読んでいたと書いている。「私はかれが、卓上にソフォクレスかエウリピデスをひらいたまま、そうくりかえすのをきいた。」

47) Adam Smith, *Correspondence*, p. 263.

48) *ibid.*, pp. 277, 278, 281, 324.

49) *ibid.*, pp. 276, 279, 281. このときの依頼状のなかに「私のために1部入手して下さるよう努力をおねがいします、愛情または貨幣とひきかえに」ということばがあって、スミスのユーモアを示している。

50) *ibid.*, p. 277, 278.

II. 蔵書の散佚

スミスが死んだとき、遺産が、蔵書をふくめいてこのデーヴィッド・ダグラス（1769-1819）によって継承されたことは、まえにのべた。ダグラスが死ぬと、かれの蔵書（スミスのそれをふくむ）は、ふたりの娘に等分されたり。この等分というのは、機械的に冊数をわけたらしく、ディドロ、ガッサンディ、モリエールの著作集、ルソーの『エミール』などがばらばらになっている。スミス自身の目録で4巻となっているラフィットが、第1巻と第2巻はエディンバラ大学、第4巻はニコルソンの寄贈（1925年）によってカコーディ図書館、第3巻は行方不明、という状態（したがって、第3-4巻はカニンガム家から後述のようにして売られたもの）にあるのは、「等分」のしかたをよく示す例といえよう。ふたりの娘、バナマン夫人とカニンガム夫人が継承したのは、じつはスミス蔵書だけではなく、ダグラス蔵書といった方が正確なのである。すなわち、それはスミス蔵書のほかに、ジョン・ミラーのもとにまなんだ法律家としてのダグラスが、スミスの生存中と死後に入手したものをふくんでいた。したがって、それらのうちで、スミスの死後に出版されたものが除かれるのは当然であるが、そのほかにもスミス蔵書でないダグラス蔵書があるにちがいない。両者を区別する明白な指標は、スミスの蔵書票があるかないかということだが、これについてもふたつ問題がある。第一は、60×38mmのスミスの蔵書票は、12折とか24折とかいう小型本には、物理的に貼れないわけではないがむずかしいので、貼られていないこと、第二は、スミスの蔵書票は、簡単なもので、容易に偽造できるし、偽造でなくても剥落したものを別の本に貼ることはできるということである。いずれのばあいも、ほんとうにスミス蔵書であるかどうかを判定することは、きわめて困難であり、つぎのような妥協にあまんじなければならない。すなわち、第一に、スミスの蔵書票がなくても、剥落が確認できるか、シリーズもので他の巻には蔵書票があるか、あるいは、バナマン、カニンガム家にスミス蔵書として伝えられたことがあきらかであるか（とくに小型本のばあい）、このどれかに該当するばあいは、スミス蔵書とみなすこと、第二に、蔵書票が偽造と確認されないかぎり、それが貼付されていれば、スミス蔵書とみなすことである。蔵書票の剥落は、製本のさいにも生じるし、そのことはかならずしも記録されないので、トロント市のメトロ・ライブラリの三冊のように、推定しかできないこともある。

バナマン、カニンガム両家のいわゆるスミス蔵書のうち、バナマン家のものは、バナマン夫人の死（1879）後、息子の牧師デーヴィッド・ダグラス・バナマンによって継承され、かれは1884年と1894年の二回にわたって、エディンバラ大学神学部（ニュー・カレッジ）に寄贈した。あとでのべるように、ボナーは、バナマン家からうけとったリストによって、この部分にはBおよびN(B)というしるしをつけている。このバナマン蔵書は、いわば無傷で神学部図書館にはいったわけだから、これとおなじ冊数がカニンガム蔵書として存在したこと、このなかのものは、小型本あるいはシリーズの一部分に蔵書票がなくても、スミス蔵書であったことを、推定してほぼまちがいがいないであろう。だが、その後の状態が完全に無傷であったかという点、図書館として完全に目録カードを作成していなかっただけでなく、地下書庫に放置して、学生が他の本をとるために大型本をふみ台にするという状態のまま、半世紀以上が経過したのだから、スミス蔵書としての特別な管理は、なかったわけである。したがって、とうぜん予想されるように、ボナーの記録と対照すると、若干の行方不明本がある。ただし、それが、神学部時代に紛失したのか、あるいは、「訪問した五つの図書館のなかで最悪の状態²⁾」という批判の衝撃によって、1970年代に中央図書館に移管したさいにそうなったのかは、わからない。

他方、カニンガム蔵書は、夫のカニンガム牧師が1878年に死んだときに、かなりのものがエディンバラで競売に付された。これが、大量散佚のはじまりであるが、そのうちで、エディンバラ大学の初代の経済学教授（1871-80）であったウィリアム・バラントイン・ホジスン（1815-1880）が購入したものは、1880年に大学図書館に寄贈された。のこりのカニンガム蔵書は、息子のR. O. カニンガムのものとなり、かれはベルファストのクインズ・カレッジの教授（化学だといわれる³⁾）であったので、そこに半分を寄贈したが、のこりの半分は売却された。このときの最大の買手は、東京帝国大学教授新渡戸稲造であり、約140点が⁴⁾、かれによって東京帝国大学経済学部の独立を記念して、同学部に寄贈された。「今日實際上の御参考にはならずとも経済学者の宝物とも申すべきものと被存候に付、右を新設経済学部へ寄贈致度候」という新渡戸の手紙がのこっている⁵⁾。

日本にきてからの、東大経済学部でのアダム・スミス文庫は、関東大震災（1923）と第二次世界大戦の戦災（1941-45）を生きのびた。前者については「永峯という小使」の奮闘がつかえられ⁶⁾、後者については、甲府に疎開させたところ、甲府が爆撃されて関係者が「青く」なった⁷⁾ という回想が記録されている。ついでに言えば、関東大震災は、東大のスミス文庫には影響がなかったけれども、横浜でスミス蔵書を1冊、焼失させた。それは、左右田喜一郎の自宅にあったルソーの『エミール』第1巻（1762）である。これはボナー目録の初版ではバナマンとされ、2版では Vol. i (?) としてバナマンとされているが、流入の経路からみればカニンガムであろう。じっさいに第3巻は東大にあり、第2巻はエディンバラにあるので、例の機械的等分方式によって、カニンガム家に帰したと考えてもおかしくはない。左右田が購入したとき、おなじ古書店（デュローかミュージアム）の目録で発注したのは、武藤長蔵であった。もし、武藤の手紙が左右田よりはやかたなら、この本は長崎に保存されていたであろう⁸⁾。

東大スミス文庫には、手稿が2冊ある。ひとつは、1781年につくられたスミス蔵書の目録であり、もうひとつは、ヴェネツィア刑法である。前者は、省略がおおくて（手書きの判読の困難にくわえて）同定が困難であるが、あとでのべるように、スミス蔵書を再構成するうえで、きわめて有力な手がかりを提供した。もうひとつの『ヴェネツィア刑法』は、1954年に新渡戸蔵書として東京の古本屋に出たものを、東大が購入したのだが、新渡戸は、ロンドンで購入したスミス蔵書を東大に直送させたはずなのに、これだけを手もとにとどめておいたのは、羊皮紙に手書きというめづらしさを別にすれば、理由がわからない⁹⁾。

なお、東大スミス文庫には、そのほかに、トマスの『ブリティッシュ・ネゴシエーター』（1759）が大河内一男によって寄贈され¹⁰⁾、1973年にはエドモンド・ウォーラーの『詩集』（1694）と『おとめの悲劇その他』（1690）の2冊合本、およびドゥ・トーの『トルコとタルタルの回想』（1784）4巻が、ピトロホリのデュヴァル書店から購入された¹¹⁾。このうち、トマスの本には、「J. シールド・ニコルスンからW. R. スコットへ、1911年クリスマス」と書かれていて、ホジスンの女婿で後継者であったニコルスンから、グラーズゴウ大学のアダム・スミス講座の教授であったスコットに、おくられたものであることがわかる。この本をボナーは、初版ではニコルスン所蔵、第2版では、「J. S. ニコルスン教授からこれを入手したW. R. スコット教授によってグラーズゴウ大学に寄贈された」と注記して、グラーズゴウ大学所蔵としている。しかし、大学側には受入れの記録はないので、スコット蔵書のままで、かれの死後ハーディング書店に買いとられたと見るほかはない。

日本には、これらのほかに9点のスミス蔵書の所在が確認されていて、そのうち、W. トムスンの『ヨーロッパ・アジア・およびアフリカ旅行記』（1782、匿名）は1918年に京都大学が購入¹²⁾、

モンボドの『言語の起源と発展』1-4巻(1773-87, 匿名)は、1917年に柴山健三によって同志社大学に寄贈された¹³⁾。柴山は、1913-14年にロンドン大学に留学していたので、そのとき、あるいは留学時代の縁でその直後に、購入したのであろう。そのほか、日本大学法学部のガリレオ・ガリレイ、スウィフト、ギボン、同歯学部(松戸)のハンター、福山大学のボッカチオは、すべて1970年代以降の入手であり、1988年には、ゴードンが雄松堂経由で大淵利男蔵書にくわえられ、また、かつてデュヴァルの目録にでていたアナクレオンが、丸善にはいった。戦後入手の分は、アナクレオンの例でもわかるように、カニンガム蔵書の売却から直接にきたものではなく、ボッカチオは一度パリの古本屋の手にわたってからイギリスにもどって日本にきたことがわかっている。あとでのべるカコーディにニコルスンが寄贈した3冊のように、ドイツ語蔵書票があることから、ドイツ人の所有だったのではないかとおもわせるものもある。

ここでもう一度、カニンガム蔵書の売却の時点にもどって、イギリス、アメリカ、カナダ、イタリアで、スミス蔵書の行方をおうことにしよう。現在のところ、これらのほかの国には、スミス蔵書はないようである。

カニンガム家の第一回売却のとき、ホジソンがかなり購入したことは、まえにのべた。地理的にも地利的にも、かれはもっとも有利(売却地エディンバラの経済学教授)であったから、すくなくとも主要部分を見のがすことはなかっただろう。わざわざ主要部分というのは、全部を買ったにしては、すくなくすぎるようにおもわれるからである。のこりはどうなったのかということになると、このときの散佚と第二回売却分の(東京大学にきたものをのぞいて)散佚との区別は、ほとんど不可能である。これらの散佚分をもっともおおく再収集したのは、ユニヴァシティ・カレッジ・ロンドンの経済学教授(1881-1927)であったハーバート・ソマートン・フォクスウェル(1849-1936)であって、かれの蔵書は、まず1903年に、ロンドン金匠組合が買いとってロンドン大学にゴールドスミス文庫として寄附し、その後の収集は1929年に、ハーヴァード大学ビジネス・スクールが、クロード・ウォシントン・クレスの寄附金によって購入して、クレス文庫とした。双方にスミス蔵書は10点ぐらいふくまれているので、1903年と1929年というふたつの時点だけをみれば、ゴールドスミスにはカニンガムの第一回売却から、クレスには第二回売却から、フォクスウェルが入手したものがはいったのだと考えたくなるかもしれないが、ゴールドスミス文庫の目録第1巻の序言は、つぎのようにのべている。「1903年から1914年まで、金匠組合は7483ポンド、大学は約7370ポンドを、この文庫に投下した。これらの金額のうちで図書の購入と製本に使用されたものは、ほとんどすべてフォクスウェルがつかった。……大学はまた、ひきつづき、文庫の維持と発展にその資金をあてた¹⁴⁾。」したがって、ゴールドスミス文庫とクレス文庫のスミス蔵書を、フォクスウェルの入手時期によって区別することはできない。

アメリカでスミス蔵書を、クレスに匹敵するだけでもっているのは、ジョンズ・ホプキンス大学のハツラー・コレクションである。購入時点は1905-6年および1912年というのだが、そのことは、新渡戸が買うまえに、かなりのスミス蔵書が市場に出ていたことを意味する。新渡戸が買ったのは1918年、ロンドンのデュロー書店からであり、その契約直後にグラーズゴウ大学からも購入希望があったことからすれば、カニンガム家の第二次売却分が、そっくり東大にきたと考えられそうだが、一次も二次も、エディンバラからロンドンへと、古書店を経由するうちにすでに散佚しつつあったのではないかという推測も可能である。エディンバラのしにせ、グラントが最初にひきうけ、デュローやミュージアム書店などに流したのかもしれない。個別的には、同志社や京大もふくめて、ミュージアム書店からの購入というのが、かなりおおいのである。もしそうだとすれば、第二次

売却を新渡戸の購入の年、すなわち1918年とする根拠はなくなるわけである。ハツラー・コレクションのうち、1905-6年に購入された10点は、第一次から、のこりは第二次から1912年にはいったとも考えられる。いずれにしても、カニングム家の二回の売却から、約500~700点が、散佚していったことは、まちがいがなく、グラーズゴウ大学にボナーが寄贈したもの、イタリア共和国元大統領ルイジ・エイナウディが購入して、現在フォンダツィオーネ・ルイジ・エイナウディにある1冊も、トロントのメトロ・ライブラリにある3冊も、また比較的最近エール大学のフランクリン・コレクションにはいった1冊も、すべてそこに起源をもつものである。いまとつぜん500~700点という数字をあげたが、これは、バナマンとカニングムがおなじ冊数をもっていったとして、エディンバラ大学のバナマン蔵書が約1000点2000冊、カニングム蔵書のうちベルファストと東大があわせて300点弱、500冊とすれば、のこりは700点となり、その後確認されたもの（クレス、ゴールドスミス、ハツラー、グラーズゴウ大学など）が100点とすれば、不明は600点となる。この数字は、現在作成中のカタログができあがり、そのなかでバナマン（これは無傷のはずだから）蔵書が確認されれば、さらにはっきりしてくるだろう。ただし、両家への等分は、点数ではなく冊数によったものだという問題はのこる。

以上は、両家に分割されたものが、スミス蔵書のすべてだということを前提している。しかし、スミスの生存中に蔵書が贈呈されることはなかっただろう。スミスは晩年のエディンバラ時代にすくなくとも、二人の友人に蔵書を贈ったことがわかっているのだ。一人は、弁護士マコノキーであり、もう一人はコミショナー・リードであって、前者には、コンドルセの三著作とラアルプとを合冊にしたものがおくられ、後者には『道徳感情論』第6版（“From the Author To Commr. Reid”）と『国富論』第4版（“Commissioner Reid”）のほか、ホラチウスなどがおくられたらしい。

ホラチウスについて、「らしい」と書いたのは、1955年に、グラーズゴウ南部のポロクシールズで見たリヴィングストーン蔵書のなかに、上記の『道徳感情論』と『国富論』とともに、フライリーフに“Jas. Reid Edin. 1793”と書かれたホラチウスと、コートニーのフランス革命論（著者献呈本）、ドゥ・ロルム、J. ヤング、R. ドズリー、タッソがあり、すべて一括して古本屋から（サミュエル・ロジャーズに贈られた『国富論』第5版といっしょに）買ったとのことだったので、ジェームズ・リードが税関委員デーヴィッド・リードの息子だとすれば、ロジャーズの本をのぞくすべてが、スミスから同僚リードに贈られ、ホラチウスにだけ、ジェームズが署名したと、考えられるからである。もちろん、両リードの関係が証明されず、ロジャーズがほかの本をもらわなかったという確証もないから、「らしい」というほかはない。なお、こうして発見された蔵書6冊は、リヴィングストーンが、マクフィーの学校友だちだったことがわかって、グラーズゴウ大学に寄贈された。

マコノキーの方は、リードより重要な関係をもっている。というのは、キャンナン版法学講義が発見されたのが、マコノキー家なのだからである。アラン・マコノキー（1748-1816）とアリグザンダ・マコノキー（1777-1861）は、父子ともにエディンバラの法律家で、父は1770年に弁護士、1779-96年にエディンバラ大学公法教授、1796年にメドウバンク卿として裁判官、という経歴をもち、息子は、1799年に弁護士、1813年に検事総長、1817-18年に下院議員となっている。コンドルセの本に書かれた「弁護士マコノキー氏、1790、アダム・スミス博士から」という字は、スミスの自筆ではなく、マコノキー自身である可能性がおおきいが、父子のうちで、1790年に、「弁護士マコノキー」と自称したのはどちらであろうか。息子は、たしかに、この時点では弁護士という肩書きしかもない。しかし父もまた、裁判官メドウバンク卿であるとともに、弁護士マコノキーでもあったはずである¹⁵⁾。キャンナン版グラーズゴウ講義（略称 *LJB*）の草稿に署名した「J. A. マコノ

キー1811」は、アリグザンダの弟であるが¹⁶⁾、経歴はわからない。この手稿については、W. R. スコットが、アリグザンダ・マレイ（1736-1795）蔵書からマコノキーにうつたと推定して、マレイの死（1795）からマコノキーの署名（1811）までの所在が不明だといっている。しかし、マコノキー家は、そのころ三代にわたって法律家を出していたのだから、法学関係の蔵書もおおく、したがってそのなかから、ジェイムズ・アランが1811年に、この手稿を自分のものとしたと考えても、おかしくはないのである。ということは、マレイからマコノキーへの手稿の移転が、1811年よりまえ、すなわちジェイムズ・アランの父の代であったかもしれないという可能性を意味する。スミスの蔵書と講義ノートは、とくに所有者にかんしては、直接に関係がない。しかし、マコノキー家が、スミスに対して、親近的な関係ないし感情をもっていたということから¹⁷⁾、蔵書の寄贈は、ほかにもあったのではないかと、想像することはできる。

デーヴィッド・リードへの寄贈は、『道徳感情論』第6版がふくまれているから、1790年であり、マコノキーへの寄贈も1790年と書かれていて、いずれもスミスが死ぬ直前（あるいは直後）に、寄贈されたことがわかる。そうすると、ほかにも側近の友人（遺言執行人のブラックとハットン、およびマケンジーなど）に、形見として寄贈したものがあつたのではないかと考えてもよさそうだが、これまでのところではなにも証拠はない。

スミス蔵書が、バナマン、カニングム両家に移ってから、バナマン蔵書はそのままエディンバラ大学にはいり、カニングム蔵書が散佚したということは、すでにのべたとおりだが、この部分は、散佚がはじまるまえにも、すくなくとも二冊がひきぬかれ、逆に散佚がおわたつたあとにも、すくなくとも一冊がのこっていた。前書のうちの二冊は、ティモシー・カニングムの『関税・上納金・補助金・国債・租税の歴史』であつて、これは1854年にカニングム家からラムジー・マカロクの手になり、現在は、オーヴァーストン文庫の一部としてレディング大学図書館にあるのだが、もう一冊、ブショーの相続税論がおなじようにしてマカロクのものとなつたのち、ジェイムズ・トムスン・クレイグにゆづられ、クレイグ蔵書の競売目録にのせられた¹⁸⁾。

他方、カニングム家にのこつた最後の二冊は、『国富論』ドイツ訳（1776）第1巻で、モロッコ皮にジョージ3世のモノグラムがあり、スミス蔵書票もはられている。ジョージ3世の蔵書がどうしてスミス蔵書にはいったのかわからないし、逆にスミス蔵書がジョージ3世蔵書になつたとすれば、スミスは寄贈本にも蔵書票をはつたことになるし、そうだとするとジョージ3世蔵書がどうしてカニングム家にまいもどつたのかわからない。しかも、この本の第2巻は、ボナーによって、カニングム家からの散佚分のひとつとして記録されているのである。

カニングム家の子孫は、W. R. スコットとは連絡があつたが、その後の消息がわからなかつた。ところが、1950年代に、バーミンガム大学のロドニ・ヒルトンのたすけを得て、ふるいヘリフォード市の電話帳からたどつて、もとその地域で教師をしていたミス・カニングムをさがりあてることができた。そのけっかであつたのが、上記のドイツ訳であり、それ以外にはなにもないということであつた。

これまでのべてきたところからあきらかなように、カニングム家からの散佚を、再収集によってくいとめたのは、まずホジスンであり、ついでフォクスウェル、新渡戸、ハツラー（ただしこれはゴールドスミス、クレスとおなじく、出資者）であつた。ボナーもまた、カタログを作成しただけでなく、収集にもつとめて、成果を母校グラーズゴウ大学に寄贈した。ホジスンの女婿で後継者であつたニコルスンは、ホジスンの蔵書をエディンバラ大学に寄贈しながら、自分があつめたスミス蔵書は、すべてカコーディ博物館に寄贈した。内容的にあまり重要でない（端本が大部分）こと、

博物館にスミス記念コーナーがあることなどが理由として考えられる。このニコルスン蔵書は、これまで報告されていなかったし、他方で、ボナーがニコルスン所有としているフィルマーは、行方不明である。

- 1) J. Bonar, *A catalogue of the library of Adam Smith*, 2nd edition, London 1932, p. xvii. 「等分 equally divided」ということばは、ボナーの初版(1894)にはない。この訂正は、マカロクがティモシー・カニングガムの『関税・上納金・補助金・国債・租税の歴史』に書きこんだノートによるものとおもわれる(これについては後述)。
- 2) H. Mizuta, *Adam Smith's library, a supplement to Bonar's catalogue*, Cambridge 1967, p. xii. これについて、書評のなかで「苛酷なことば harsh words」という反響があり、調査当時の図書館長ラムのあとをついだハワードは、スラッファにあてて、「ミズタ目録を out of date にしてみせる」と書いた。ハワードは1988年に、大学中央図書館の貴重書司書に転じた。
- 3) ボナーは naturalist と書き、矢内原はそれをうけて「博物学」と書いた(次注の論文)が、ベルファストの名誉教授ブラックは、化学ではないかといっていた。さしあたってどうでもいいことなので、確認にいたっていない。
- 4) 矢内原忠雄「東大経済学部所蔵アダム・スミス蔵書について」(アダム・スミスの会/大河内一男編『アダム・スミスの味』東大出版会, 1965年) p. 199 によれば, 141点, 308冊であるが, セットで1点とみるか, それぞれ単行書とみるかによって, 数字がわずかながら変動するので, 約140としておく。
- 5) 同, p. 198. 新渡戸の山崎寛次郎あての手紙の一部分が, 矢内原によって引用されている。「(前略)不図数日前当市書肆 Dulau & Co. の目録に依りアダム・スミスの蔵書三百余冊が売物となり居るを承知致候。右は御承知の Bonar "List of the Books in the Library of Adam Smith" 中に掲げられたる物の一部にて, 今日実際上の御参考にはならずとも経済学者の宝物とも申すべきものと被存候に付, 右を新設経済学部へ寄贈致度候。就ては本日右書肆より直接貴学部宛書籍入六箱発送為致候間, 到着の上は何卒可然御取計ひ被成度候。実は拙者儀買入申込後可なり諸方面より希望出で, 殊に蘇国の某大学より切なる希望も有之候へ共幸に拙者の手に落ち候故, 愈々日本の持物と相成り, 又帝大の一の誇とも相成候事は甚だ愉快に存候(下略)」
- 6) 同 pp. 198-9. 「それでこちらに来てから後に, この蔵書の運命はどういうことになったかと申しますと, 大正十二年の関東大震災のときに経済学部の研究室は丸焼けになりました。その際書物も大部分焼けてしまったのであります。永峯という小使が当時おりまして, これは目っかちの小男でしたが, かねがね高野岩三郎先生の薫陶といいますか, 感化によって, 書物というものは大事なものである。ことに先生方が大事にしている本は特に大事だということを知っておりまして, 震災のときに猛火をくぐって, このアダム・スミスの蔵書を救い出したのであります。永峯と, もう一人の小使が助太刀をいたしまして, それでこの蔵書は関東大震災の厄を免れたのであります。」
- 7) 大河内一男『暗い谷間の自伝』中公新書, 1979年, p. 216.
- 8) 武藤長蔵「アダムスミスの生涯及其著作(其三)」長崎高等商業学校研究館年報『商業と経済』5-2, 1925, 別刷 pp. 22-23.
- 9) 田添京二「羊皮紙・手書きの一本『ヴェネチア刑法』について」前掲『アダム・スミスの味』pp. 315-17.
- 10) 大河内一男「S. Thomas, The British Negotiator について」前掲『アダム・スミスの味』pp. 312-14.
- 11) 水田洋「アダム・スミスの蔵書」アダム・スミスの会/大河内一男編『続アダム・スミスの味』東大出版会 1984年, pp. 305-13.
- 12) 出口勇蔵「W. トムソン『ヨーロッパ・アジア・およびアフリカ旅行記』二巻(一七八二年)について」前掲『アダム・スミスの味』pp. 305-12.
- 13) 山崎怜「あるスミス蔵書のこと」前掲『続アダム・スミスの味』pp. 293-94.
- 14) University of London Library, *Catalogue of the Goldsmiths' Library of economic literature compiled by Margaret Canney and David Knott*, Vol. 1, Cambridge 1970, p. xviii.
- 15) ただし, W. R. スコットは, アリグザンダ・マコノキーについて, 「裁判官になったあとで『弁護士』という肩書の蔵書票をはることは, どうていありえない」と書いている。J. Bonar, *A catalogue of the*

library of Adam Smith, 2nd ed., 1932, p. 212.

16) Adam Smith, *Lectures on justice, police, revenue and arms*, ed. by E. Cannan, Oxford 1896, pp. xvi-xvii.

17) ただし、スミスが1765年にトゥルーズで、ダグラス事件の証人となったとき、アリグザンダ・マコノキーは、反対側の弁護士であった。W. R. Scott, *Adam Smith as student and professor*, Glasgow 1937, p. 259.

18) M. A. Bouchaud, *De l'impôt du vingtième sur les successions*,... Paris 1772.

III 蔵書の記録

スミス蔵書の目録を最初につくった（正確に言えばつくらせた）のは、スミス自身であり、東大アダム・スミス文庫のなかにある1781年の手書き目録がそれである。これは、省略書架目録（著者名順でない）であること、スミスの生涯のさいごの9年がふくまれないことが、難点であるが、巻数と省略の範囲内での語順はほぼ正確であり、復原の手がかりとして有力であった。後述の矢内原カタログの後半に、このスミス・カタログが全部印刷されていて、ボナー・カタログへの参照注がつけられている。

本格的な目録作成作業は、ジェイムズ・ボナー（1852-1941）によって前世紀末に開始された。ボナーは、1874年グラズゴウ大学でMAをとったのだから、アダム・スミスの後輩にあたる。しかも彼はライプツィヒとチュービンゲンの大学にまなんだのち、スネル奨学金によってペリオルにはいるので、ここでもスミスの後輩になる。この時代のボナーに影響を与えたのは、アーノルド・トインビーとアルフレド・ミルナーであり、かれが1877-80年に、東ロンドンで大学公開講座の講師として開拓者的役割を演じたのは、そのためであろう。1881-1907年にはかれは文官任用委員会の試験官であり、そのご1919年まで、造幣局オタワ分室次長であったが、引退後はロンドンのハムステッドに住んでいた¹⁾。ボナーがスミスの蔵書に関心をもったのが、いつごろ、どのような理由によるのかは、わからないけれども、東ロンドンでの公開講座時代に、かれはすでにアダム・スミス・クラブをつくっていたし、『哲学と経済学』（1893）でも、スミスに一章をさいている。

ボナーの経歴を考えると、かれがスミス蔵書を直接に点検したのではないことは、容易に想像がつく。初版の序文には、「編者は、きわめて少数のばあいしか、自分で本をみて処理することができなかった²⁾」とあり、第2版の序文には、「バナマン、カニンガム両家からくわしいカタログを受けとった³⁾」とあるし、エディンバラ大学神学部にあったスミス蔵書の一冊（テオドシアヌス）にも、ボナーの手紙（1893年4月19日）が貼付されていて、それは、当時の主任教授であつたらしいジョージ・スミスにあてた、蔵書リスト受領の礼状である。

ボナーは、1932年に80才で蔵書目録の第2版をだしたあとも、『エコノミク・ジャーナル』に二回にわたって（vol. 44, p. 349, 1934; vol. 46, p. 178, 1936）、追加を発表した。そのご、スコットが、東京からとりよせた1781年目録のコピーにもとづいて、追加書目をつくり、ボナーに送ったという。シャーラスのボナー追悼文によれば、スコットのノートのほかに、ボナーは、再版カタログに白紙を挿入して製本したものをもっていたそうだから、第3版の準備が進行していたのだろう。しかし、グラズゴウ大学に寄贈されたボナー蔵書のなかには、それらしいものは見あたらない。

散佚分のうちで、東大にはいったものについては矢内原目録が出版され⁴⁾、クレスとゴールドスミスにはいったものは、それぞれの総目録に収録された。ジョンズ・ホプキンズのハツラー・コレ

クシオンについては、クロード・ジョーンズによって1940年に、チャールズ・J・マクガーヴィによって1949年に報告されたが⁵⁾、ヴァイナーは、これについて二つの問題を提起した⁶⁾。ひとつは、1912年にまとめてミュージアム書店から購入されたというが（実際にはブルーイトのように1930年に購入されたものもある）、そのうちボナー目録にないものは、1878年のカニンガム家売却からきたものであろうということ、もうひとつは、とくに『新旧交易原理の比較』（1788）とテュルゴの『富の形成と分配』（1793）をあわせて製本した一冊は、デーヴィッド・ダグラス蔵書からすでに流出したのではないかということである。このうち後者は、スミスの死の直前直後の散佚の問題として、前章でとりあげるべきであったが、ヴァイナーが、推測の根拠としているのは、Wm. J. Powell という署名と、Abergavenny, Grays Inn, 179□, という地名・機関名・年だけなので、パウエルがなにものかわからないかぎり、展開のしようがない。

また前者は、ボナーがあげているカニンガム、バナマン両家からの完全なリストが、1878年のカニンガム売却分をふくまないということを前提しなければ、なりたないのだが、もしそうだとすると、ボナーが、QC（ペルファスト）でもC&J（カニンガムから日本へ）でもなく、Cというしるしをつけた本の存在を、売却リストなしにどうして知りえたのかという疑問がでてくる。ボナーは、第2版の序文で、Cはカニンガム家留保分だけでなく、「著者寄贈本をのぞいて、すべての行方不明本は、Cとすべきだと推定されている」のだと書いた⁷⁾。しかし、それらが存在したことがわからなければ行方不明であることもわからないわけなのに、どうしてCのマークをつけることができたのだろうか。そうするとボナーがカニンガムからうけとったリストは、1878年（目録初版の16年前）の売立（おそらく競売）リストをふくんでいたとしか、考えられない⁸⁾。書籍競売目録は、スコットランド中央図書館（NLS）にもブリティッシュ・ライブラリ（BL）にも、かなりよく保存されているのだが、そのなかにカニンガム家のものは見あたらない。サザビーのような大手の競売業者が介入していれば、その方面からさぐっていくこともできるが、現在までのところ手がかりは皆無である。

もしボナーが、初版のときに、両家から完全な目録をうけとっていたとしたら、増補再版の必要がどうして生じうるだろうか。可能な説明は、1878年売却分があとからわかったということか、これまでCとされていたもののほかに、新手のCがあらわれたことしかない。あるいはCでなくても、マコノキー、リード、パウエル、マカロクのばあいのように、かなりはやい時期に寄贈された本が、でてきたということも考えられる。それをたしかめるための有力な手段が、1781年目録であるが、それをボナーは利用していないし、利用したとしても1781-90年の入手分は、当然わからない。

そこで、1781-90年分はあきらめるとして、スコットがやったように、1781年目録によって、ボナーを補充することが必要になるが、そのばあいに、この省略目録の項目が完全に同定できれば、1878年の売立目録があったとしても、1781-90年分を知る手がかりとしての意味しなくなるわけである。矢内原目録が、その後半に、1781年目録を収録したとき、ボナー目録との対照は一応おこなわれたけれども、それは、スミス目録の諸項目がボナーに収録されていることを示しただけで、その対応関係の指摘でさえも、やらないほうがよかったくらい不完全であった。たとえば、『ジュリーまたは新エロイズ』がボナー目録のルソーの項に副題の『ふたりの恋人の手紙』として収録されていることが無視され、『世故の人』がボナーのマケンジーの項に収録されていることが無視されているという調子である。そのうえ、じっさいにボナーにないものは、同定されなかった。

ボナー目録の補遺というかたちで王立経済学会から出版された水田目録（1968）⁹⁾は、1781年目

録だけでなく、ボナー自身の追加、ハツラー・コレクションについてのアメリカからの報告、さらにエディンバラ、グラズゴウ、ベルファスト、ロンドンにおける実地点検にもとづいて、ボナーを補足したものであるが、いくつかの欠陥があった。タイトルの転記にさいしての誤記や脱落という初歩的なミスはいうまでもないが、1781年目録の省略記述を同定するときに（このことに内在する問題はあとでのべる）、しばしばBLやBNなどの目録で確認するとどめ、じっさいに現物を手にしなかったし、ボナーが収録したものについては、その記述にあやまりがあっても、追加を意味するのではないかぎり、ふれなかったのである。ボナー目録の大部分は、両家から提供されたしろうと目録によっているので、ローマ数字の読みちがいがあったり、実際には存在しない版がでてきたり、おおくの点で訂正を必要としたのだが、それは、福島大学経済学部『商学論集』（25-1, 25-3）と『アダム・スミスの味』（1965）pp. 215-303に発表されただけであった。『商学論集』の抜刷がどういう偶然によってカスラフファの目にとまったことが、上記水田目録の出版のきっかけになったのである。なお、『商学論集』に送られた原稿は、当初『一橋論叢』に送るつもりでいたところ、そのときの論叢編集者は、諾否の回答を与えなかった。

スラフファが、『エコノミク・ジャーナル』の論文として発表することをすすめてくれたものが、単行本として出版されると、いくつかの書評があらわれ、またいくつかの影響がみられたが、書評のなかではヴァイナーのものがもっともくわしく有益であり、影響としては、第一には前述のように、エディンバラ大学がスミス蔵書を中央図書館に集中し、目録にくみ入れたこと、第二には、ベルファストのブラックがクインズ・ユニヴァシティ所蔵分について、再点検をしたことがあげられる¹⁰⁾。エディンバラでは、マリ・シンプスンによって、いくつかの発見と紛失が確認されたが¹¹⁾、ベルファストでは、むしろ紛失の方がおおかった。ヴァイナーの書評は¹²⁾、ボナーにあって水田にないものとして、トロント大学所蔵（じつは公共図書館）の3冊合本のパンフレットをあげ、さらに追加として、スコットのメモによってムアの『哲学論文集』（1759）とプフェンドルフの『自然法』フランス訳、またかれ自身がドイツの古本屋の目録でみたというニコルソンの『スコットランド歴史文庫』（1702）、ニューヨーク公共図書館所蔵のパウナル『アダム・スミスへの手紙』（1776）をあげた。このうちプフェンドルフは、すでに水田目録にでているし、ムアについてはヴァイナーの誤解¹³⁾である。ほかの2点は追加である。

もうひとつ、ヴァイナーが指摘したのは、ヘンリ・ヒッグズの『経済学書誌1751-1775』（1935）に収録されたスミス蔵書である。この書誌は、ゴールドスミスとクレスの目録が出版されるまえに、フォクスウェルがあつめた資料にもとづいて、ヘンリ・ヒッグズの編集で出版されたもので、フォクスウェルの蔵書だけでなく、かれが古本屋の目録や文献の注記などからひろいあつめた書誌的情報を収録し、しかも、分類項目内の記載は順序不同という、常識はずれのしろものであるが、ヴァイナーは、それがスミス蔵書を50点ふくんでいるのに、水田目録にはそのうちの22点しかないのは、どうしたことかというのである。だが、ヒッグズの書誌は、ボナー目録からも収録したことを明記しているし、フォクスウェルの資料にはとうぜん、クレス、ゴールドスミスがふくまれているから、なにも問題はなはずである。

以上のような経過のうちに、現在作成中のスミス蔵書目録は、つぎのような方針にもとづいている。

1 スミスの蔵書票がはられている本は、すべてかれの蔵書と見なして、そのタイトル・ページの記述を、できるだけ正確に転記するが、以下の点で省略と変更をおこなう。

(1) 大文字の使用は、必要最少限にとどめる。したがって、ギリシャ語とフランス語のタイ

トルについては、小文字にしたばあいにアクセント記号を追加する。

- (2) 著者名は、題名的一部分となっていないかぎり、省略する。姓名を省略しないばあいも、職業・地位をしめすことばは、省略する。
- (3) モットーは、例外なく省略する。
- (4) 出版者・印刷者名は、省略しないが、その住所は省略する。
- (5) 出版年は、原典の記述様式と位置にかかわらず、最後にアラビア数字で示す。
- (6) 版次・巻数は、タイトル・ページにあるかぎり、タイトルの一部として示すが、そうでなければ、2版以降、2巻以上のばあいに注記する。

2 蔵書票がなくても、その剥落が推定されるもの、セットのなかの他の巻に貼られているもの、エディンバラ大学、ベルファスト大学、東京大学（スミス蔵書をバナマン、カニンガム両家から直接またはほぼ直接に継承した図書館）で、スミス蔵書と見なされているものは、それにしたがう。記述の様式は前項のとおり。

3 スミスおよびボナーのカタログに記載されながら所在が不明のものについては、できるだけその記載にちかい書誌データをもったものをさがし、それについて1のような転記をする。ふたつのカタログのうち、スミスのカタログは、著者名、編者名、巻数を、ボナーのカタログは、たいいていのばあい、そのうえに出版年、出版地を示しているのので、それらからスミスが所有していたと推定される版本をさがしだすことは、原則的には困難はなかった。困難は、つぎのようなばあいに生じた。

- (1) 記述にまちがいがあるばあい。まちがいと断定するには、記述どおりの版本が存在しないことを確認しなければならないわけだが、たとえば、ボナー・カタログには、アディソンの作品集が、バーミンガム、1741年として記載されているのに、1741年バーミンガム版は存在せず、1761年版しかない。これは MDCCLXI を MDCCXLI と誤読したためであろう。また、ゴールドスミス詩集2巻というのも、ゴールドスミスには2巻本詩集はないので、作品集のタイトルの誤記と考えられる。
- (2) カatalogの記述と一致する版本が見あらず、前項のように誤記と推定する根拠がないばあい。

たとえばアエスキネスとデモステネスの弁論集は、スミス・カタログの記述どおりのものが、ボドリ안의カタログにしかなかった。しかも、それにはタイトル・ページがなかったのので、タイトル・ページなしにどうしてタイトルがわかったのかを、きこうとおもってつぎにいったときには、それはカタログから削除されていた。したがって、これは現在のところ謎である。また、スミス・カタログに、*Des corps politiques et de leurs gouvernements* 2 Toms. という匿名書の記載があり、これはヒッグズの『経済学書誌』(item 3347)では、J. C. de Laine の著書で、リヨン1764年出版、プラトンの共和国の抄訳であるとされている。ところが、レイヌでさがしても、プラトンでさがしても、出てこない。あきらめかけたときに、ホップズ生誕400年記念の学会で、フランスワ・トゥリコーにあった。かれは『リヴァイアサン』を、ラテン語版をふくめてフランス語に全訳した、リヨン大学教授である。質問に応じて、トゥリコーがしらべてくれたところによれば、著者は J. C. de Lavie であり、内容は、プラトンの抄訳というより、ボダンの要約であった（序文には、これは要約ではなく、ボダンよりも順序と方法と推理においてまさっている、と書かれている）¹⁴⁾。ヒッグズが、手書きの Lavie の vi を in と誤読したのだろう。

スミス・カタログには、どうしても確認できないものが、なお5点あって、そのうち3点は、『ラロシュの高等法院』、『ルソー著作集10巻11巻』、『ルソー関係論集』というように、記述があまりに漠然としているが、あとの2点は、*Mervilles Lexicon de mathematiques, Vitriarii praelectiones in Grot : de Jure* と、かなりはっきりしている。前者は J. Rogg, *Handbuch der mathematischen Literatur vom Anfange der Buchdruckerkunst bis zum Schlusse des Jahrs 1830*, Tübingen 1830, erste Abteilung S. 234 にあることがわかったけれども、現物は、BN, BL, NUC にない。後者は、BN, BL, NUCなどのほかに、レイデン大学とオランダ国立図書館でもしらべたが、見あたらない。

ボナー・カタログでは、*Recueil des comedies et tragedies des plus celebres*...Edinbourg 1784というのが、ESTC データベースにない。

- (3) 逆に、スミス・カタログには、版次も刊年もないから、同一著書、同一題名（カタログに省略記載されたかぎり）のものが、複数あったらどうするか。それらのうちのどれをスミスがもっていたかは、確認できないから、その範囲でいちばんはやいものをとるといって、きわめて安易な方針をとったが、たとえば、ふるい版とファウルズのリプリントでは、後者の方が確率がたかいかもしれない。したがって、スミス・カタログに、著者名のほかに、編者や巻数が示されていて、それに該当する版（および省略されてはいても語順まで一致する版）が、ひとつしかないばあいものをのぞけば、スミス・カタログだけからの推定は、便宜的なものである。

4 編者の注は、紙の大きさをたてよこのミリメートルで示すことにはじまり、補足的書誌事項、所在、典拠（主としてふたつのカタログ）、ファウルズ版とエルセフィエル版についてはギャスケル¹⁵⁾とウィレムス¹⁶⁾のカタログのアイテム番号、スミスの著作と手紙における利用あるいは言及、逆にスミスへの言及、さらに、スミスとの関係で重要とおもわれる著者については、簡単な紹介という構成である。おわりの三点は、どこまでくわしくするかを、一定の評価によってきめなければならない。たとえば、ニューカスルの教会オーガニストという注記が必要かどうかは、論争の余地があるだろうが、それは研究の今後の展開をどこまで考慮にいれるかということでもある。

1) ここでの略歴は DNB によっているが、*Economic Journal* 1941 と *Proceedings of the British Academy*, vol. 27, 1941 に G. Findlay Shirras の回想記がある。

2) J. Bonar, *A catalogue of the library of Adam Smith*, London 1894, p. ix.

3) J. Bonar, *op. cit.*, 2nd ed., 1932, p. xviii.

4) T. Yanaihara, *A full and detailed catalogue of books which belonged to Adam Smith now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with notes and explanations*, Tokyo 1951.

5) Claude Jones, Adam Smith library-some additions, *Economic History*, vol. 4, no. 15, 1940, pp. 326-8. Charles J. MacGarvey, Notes on Adam Smith's library and the Bonar Catalogue 1932, *Economic journal* 1949, pp. 259-64.

6) J. Viner, Guide to John Rae's life of Adam Smith (prefixed to *Life of Adam Smith* in the Reprints of Economic Classics by Augustus M. Kelley, New York 1965), pp. 117-138.

7) Bonar, *op. cit.*, 2nd ed., p. xxxi.

8) しかし、この想定は、後述 (p. 25注2) のテュルゴの『予算書』についての、ボナーの説明と矛盾する。くわしいリストをうけとったにしては、説明が簡単すぎるのである。

9) H. Mizuta, *Adam Smith's library, a supplement to Bonar's catalogue with a check-list of the whole library*, Cambridge 1967.

10) R. D. C. Black, in *History of Economic Thought Newsletter*, No. 3, Nov. 1969, pp. 20-32.

- 11) Murray C. T. Simpson, Books belonging to Adam Smith in Edinburgh University Library : a survey of newly discovered items, with a general discussion. *The Bibliothek*, vol. 9, 1979, no. 6, pp. 187-199.
- 12) J. Viner, in *Studies in Burke and his times*, vol. 9. no. 3 (Spring 1968).
- 13) James Moor (1712-1779) はギリシャ語教授として、スミスの教師であり同僚であったが、『哲学論文集』という著書はなく、ヴァイナーは *Essays; read to a literary society*… 1759のタイトルを誤読したようである。(校正付記 実はこの誤読はスコット自身のものであって、スコットはスミス・カタログにある *Philosophical Essays* がヒュームまたはバルフォアのものであるにもかかわらず、前記のように誤読し、それをヴァイナーがひきついたのである。)
- 14) ケラルールの書誌事典 (J. M. Quérard, *La France littéraire, ou dictionnaire bibliographique*, vol 4, Paris 1830) によれば、ラヴィーは、ボルドーの高等法院長であった。ボルドーとトゥルーズは、ガロンヌ河でむすばれているし、スミスがパリからトゥルーズにくるとき、ボルドーを通過した可能性もある。したがって、ラヴィーがスミスに会った可能性もあるわけだ。しかも、問題の著書の第2版(1766)には、*Discours sur les loix* という序論がついていて、そのなかに『道徳感情論』フランス訳(1764)からの引用がある。引用されているのは、金持の邸宅の外壁の装飾についての文章だから、どうでもいいようなものだが、この1764-1767年という時期は、スミスの大陸旅行の時期と一致する。すなわち、かれは1764年1月末か2月はじめにロンドンを出発して、パリに10日間滞在したのち、トゥルーズに着いて、そこに1年半滞在する。そのあとで2か月にわたって南フランスを旅行したのち、ジュネーヴに着いて1765年12月まで滞在する。そして、12月から翌年10月までパリに滞在して、帰国するのである。この期間にスミスがラヴィーに会い、それがきっかけになって、ラヴィーが序文を書いて、スミスを引用し、その本をスミスに贈呈した、ということは考えられる。
- 15) P. Gaskell, *A bibliography of the Foulis Press*, second edition, Winchester 1986.
- 16) A. Willems, *Les Elzeviers. Histoire et annales typographiques*, Bruxelles, Paris, La Haye, 1880.

IV 蔵書の分析

あたらしい蔵書目録の原稿は、現在(1989年3月) item 1000まで、すなわちほぼ半ばまでできていて、全部が一応リストに収録されるのは7月末の見込みであり、そこで残った疑問を、8月にアメリカとイギリスで解決する予定である。

したがって、全体の分析は、出版後にゆづらなければならない(それどころか、2000にちかい蔵書の「分析」などということが、可能かどうか疑問である)。しかし、これまでの1000点についてはもちろん、そのあとの約1000点についても、カードは作成してあるのだから、いくつかの特徴をあげることは、現在でも可能である。

まず、全体の印象としては、ギリシャ、ローマの古典がおおく、とくにストア学派のものは、かなりマイナーな著作まで、よくあつめてあること、スコットランド啓蒙の主要著作はほぼそろっていること、文学作品としては、小説より詩と劇がおおく、小説としては、マッケンジー、スウィフト、スターンぐらいしか見あたらないこと(『デカメロン』のようなものを小説とみればすこし多くなるが)、神学・宗教関係はきわめてすくなく、『説教』と題されるものは3点しかないこと(しかも、そのうち、キャップの説教はあとでのべるようにアメリカ革命についてのものであり、マシヨンの説教は、たしかに『道徳感情論』でとりあげられてはいるが、批判の対象であり、スターンのヨリックは、小説であって説教ではない)、諸国の歴史・紀行・探検記などがかなりおおいこと、それらにくらべると経済書はむしろすくないくらいであることを、指摘することができる。

しかし、目録が全体としてどういう効用をもつかといえは、スミスの想源だけでなく、影響をさぐるための手がかりとしてであろう。想源については、すでにキャンナンやグラーズゴウ版著作集の

編集者が、かなりの仕事をのこしている（フランス側については弱い）が、蔵書をつうじて影響をさぐるとは、ほとんどおこなわれていないので、以下はそのこころみである¹⁾。

ひとつの手がかりは、蔵書中にある著者寄贈本である。これは約10点、書きこみによって判明しているが、そのなかにはベンサムやテュルゴ²⁾、あるいはビートスンやブルースのように、スミスの手紙などにはっきりと関係が示されているものと、カゾーやコートニーのように、交友関係がわからないものがある。またキャップのように、現物が行方不明であるために、寄贈らしくても確認できないものもある。ロバート・ウォーレスの息子のジョージについては、1754年からエディンバラ弁護士協会の会員であったとしかわからないが、晩年のスミスとエディンバラで交友関係があったと推定できる。

そのような限界はあるけれども、同世代と後世代から、比較的知られていない著作をいくつかあげてみよう。同世代では、まず、すぐまえにあげたニューカム・キャップ（1733-1800）がアメリカ革命について、ヨークの非国教徒集会でおこなった反戦平和の説教がある。これは1952年秋に、ヨークの古本屋トマス・ゴドフリのカatalog 246に、25シリングで出ていた。当時は為替管理がややゆるめられて、図書代金は送金できるようになっていたのだから、買ってあげばよかったのだが、まだスミスの蔵書自体にあまり関心がなかったし、説教というものの重要性についても認識がなかった。それに就職3年目の助教授の月給（2万円ぐらいと記憶する）では、1500円の本をかんたんに買うことができなかったのだ。しかし、ブリティッシュ・ライブラリでこの説教を読み、1776年のイギリスでこういう発言をしたことの意味がわかってきたし、妻のキャスリンが書いた伝記によって、リーチマンをしたってグラズゴウにきて（1752-55）、スミスともかなり親しかったこともわかった。それらについては、別に書いたところにゆずって、ここでは、ふたつのことだけを報告しておこう。ひとつは、スミスの手紙をふくむキャップ文書とでもいうものが残っていないかということで、この点については、グラズゴウ版著作集の手紙を編集したロスも気づいていなかったし、ヨーク寺院図書館からの回答は、「われわれはニューカム・キャップの著作をほとんどすべて所蔵している」というだけで、writings の内容は、じっさいにいつてみなければわからない。もうひとつは、前記のアメリカ革命についての説教が、たいへん好評だったということで、それは、『ヨーク新聞回想記』（1868）につけられた「16, 17, 18世紀の著者・印刷業者・出版業者についてのノート」の、つぎのような記述からわかる。「キャップ氏によって、1776年12月の国民ざんげの日におこなわれた説教は、かなりの注目をひき、たちまち版をかさねた。当時の卓越した政治家たちが何人も、それに最高度の称賛をおくった。サー・ジョージ・サヴィルとバーク氏は、それを歓迎し、ポートランド侯はそれを読みたいといい、北部巡回裁判所首席でのちに検事総長となったジョン・リー氏は、声を大にしてそれをほめた。ほかのふたつの説教も同様に好評で、著者をおおくの著名人の尊敬の的にした。それらのうちのある文章が、アースキン氏によって、トム・ペイン裁判における有名な演説のなかに引用された³⁾。」

同時代人としてはもうひとり、『国富論』がでた年にそれを批判した手紙を出版した、前マサチューセツ総督トマス・パウヌル（1722-1805）をあげよう。かれはスミスよりまえに首府のアメリカ移転論に言及していることでも、注目されるし、『手紙』のスミスへ寄贈本がニューヨーク公共図書館にあることは、ヴァイナーの報告によってわかった⁴⁾。スミス自身の蔵書目録に、著者名なしで、『新旧両世界間問題の現状についてヨーロッパの主権者たちによびかけたおぼえがき』というのがあり、これがパウヌルの著書であることが確認された。これまでの経過から、著者寄贈と考えていいだろうが、現物は行方不明である。しかも、めんどうなことに、初版と2版がともに匿

名で1780年に出版され、エディンバラ大学図書館、ブリティッシュ・ライブラリ、クレス・ライブラリにあるのはすべて2版である（ボドリアンのは紛失）。スミスがどちらの版をもっていたのかわからないのだから、2版からデータをとってもいいわけだが、同一タイトルのばあいは最初の版によるという原則があり、また著者寄贈であるとすれば初版であった可能性がおおきい。ようやく初版にめぐりあったのは、エール大学のバイネッケ図書館であった⁵⁾。

この本には、スミスからの引用らしいものがひとつあるのだが、どこからかは示されていないし、現在のところ、まだ不明のままである。それは、113ページに、引用符をつけ、「アダム・スミス博士」と注記してある、つぎの文章である。「農業国民 a landed nation にとって、自国の職人、製造業者、商人を奨励し増加させるための、もっとも有利な方針は、他のあらゆる国民の職人、製造業者、商人にもっとも完全な自由を許容することである。」

スコットランド教会の民衆派から、プリンストン大学（当時はニュージャージ・カレッジ）の初代学長となった、ジョン・ウィザスプーン（1723-1794）の著作は、スコットランド時代のものも、スミス蔵書にはないが、つぎの匿名パンフレットは、かれにむけられたと考えていいであろう。シルヴァスプーンとはウィザスプーンのことである。『詩人トマスに詩による予言第45章、注と説明つき、アメリカ反乱の説教師シルヴァスプーン博士に献呈、エディンバラ1776年』。このパンフレットは、9点を合わせて製本したなかにあるのだが、フライリーフには10点のタイトルが書かれていながら、そのうちの1点がなく、そこにあるべきスミスの蔵書票もない。ボナーが、Poems (miscellaneous) の項に、合計10点としているのは、フライリーフの書きこみを信用したためであろう。脱落している *The keekeiad. A poem.* (『のぞき見』?) は、ジョン・マクローリンの匿名の詩で、初版はエディンバラ1760年だから、スミスの蔵書であってもふしぎではない。蔵書票がないのは、製本のときに、パンフレットの表紙とともに捨てられたためだろう。

わかい世代のなかで、バロン、ビートスン、ブルース、ワトスン、オーグルヴィなどについては、すでに別のところで、またこの小論のなかでも、いくらかのべておいた（ただし、オーグルヴィは、スミス蔵書とは直接に関係がない）。かれらとスミスとの関係をするための手がかりは、まずスミスの手紙であるが、そのほかに『グラーズゴウ大学入学記録』⁶⁾ が公刊されている。といっても、正規に入学しなくても受講はできたから、オーグルヴィやワトスンのような例もでてくる。逆に、ディクスンという著者について、上記の『記録』から情報をひきだそうとしたところ、別のディクスンが網にかかった。これも蔵書とは関係がないけれども、スミスの影響（ミラーのといふべきか）の一端を示すものとして、あげておこう。蔵書目録の主要目的のひとつは、そこにあるのだからである。

それはウィリアム・スティーラー・ディクスン（1744-1824）というアイアランドの牧師で、1791年に結成されたユナイテッド・アイリッシュメンの会員であった。この組織は、アメリカとフランスの革命に刺激され、直接には革命フランスの援助をえて、アイアランド独立を実現することを目指していた。ディクスンがそこでどういう役割を演じたかは、課題として残しておくほかはないが、かれの経歴をみると、1761年にグラーズゴウ大学に入学したということだから、スミスの最後の学生だったわけであり、かれ自身、スミス、ミラー、リーチマンから影響をうけたことに感謝していたそうである。かれは、1776年12月13日、すなわち前記のキャップの説教とおなじ日に、説教のなかで、対植民地戦争を「気ががい十字軍」とよんで、裏切者という非難をうけた。

ジョージ・チャーマズ（1742-1825）は、アバディーンのキングズ・カレッジとエディンバラ大学にまなび、1763年にアメリカにわたって、1775年に帰国、ロンドンに定住したのだから、直接にス

ミスのおしえをうけたのではないが、『ブリテン国力の歴史的比較推定』（1782）をスミスに寄贈し、晩年のスミスと手紙をかわしている。その著書のなかでは、スミスがつぎのように称賛されているのだ。「この主題は、アダム・スミス博士によって、適切に議論され、みごとに説明された。博士は、まえにはわれわれの良俗を強化したことにより、のちにはわれわれの知性を教化したことにより、称賛される値うちがある」⁷⁾。

シャルル・カゾー（1727-1796）という自称侯爵（むしろ同世代だが）は、『社会機構の多数の部分についての考察』（1785）をスミスに贈り、そのなかで、「すばらしい『国富論』』といているけれども、スミスとの関係は、いまのところわからない。

『フランスにおける最近の革命の哲学的省察』（1790）を贈ったジョン・コートニー（1741-1816）についても同様で、わからないのはスミスとの関係だけではなく、*DNB* が、「フランスの革命家たちへの熱烈な共感を表明した」とする根拠もみあたらない。ほぼバークとおなじではないかとおもわれるし、バークとの関係でスミスに贈ったと、考えられないこともない。そして、*DNB* の記述にもときどき、いい加減なものがあるから、さしあたっては信用しないことにしよう。

さいごに、晩年の側近ともいべきヘンリ・マケンジー（1745-1831）とジョン・マクファーランをあげておこう。マケンジーはいうまでもなく、当時のエディンバラ文壇の王者で、スミスについてのエピソードを書いているところからみると、かなりしたしかつらしい。かれの作品は、『感情の人』『世故の人』『ジュリア』と、ふたつの雑誌『ミラー』と『ラウンジャー』が、すべてスミスの蔵書のなかにあり、『ミラー』には「著者たちからアダム・スミス氏に」と書きこまれている。マケンジーは、スコットランド啓蒙の最後の段階を知るには、不可欠の情報を提供するであろう⁸⁾。

ほぼ同様な位置をしめるだろうと予想されるのがマクファーランであり、かれは生没年さえわからないのだが、キャノンゲイト教会の牧師だったのだから、スミスとの日常の交際があったと推定できる。事実、かれは『貧民についての研究』（1782）と『国民的重要問題論集』（1786）を、スミスに寄贈しているのである。『貧民について』は、クリスチアン・ガルヴェによって、ドイツ語に訳されたという意味でも、注目にあたいするのだが、これまでのところ、エアランゲンのノルベルト・ヴァツェクが、学会報告のなかでわずかに言及したにすぎない。質問に対してヴァツェクは、これから研究しようとおもっているとしか、こたえなかった。

以上のような手がかりは、さらに増加するとおもわれるが、それが研究成果の増加につながるかどうかは、研究者の力量の問題である。

1) 以下にのべることのなかで、キャップ、ウィザスプーン、ブルース、パロン、マケンジーについては、「スコットランド啓蒙と市民革命」（田中正司編著『スコットランド啓蒙思想研究』北樹出版、1988年、所収）といくらか重複することはさげられない。

2) ペンサムからは、有名な『高利の擁護』（1787）と『重労働法案について』（1778）が、寄贈された。後者は現在、グラズゴー大学図書館にあるが、前者は、1936年にボナーによって、マサチューセッツ州ウースターの G. A. ガスキル所有と報告されたまま、行方不明である（ハーヴァードの K. カーペンターは、一度所在を確認したといっている）。テュルゴについては、事情がやや複雑である。まずボナーが1894年の初版で、「テュルゴの筆蹟でアダム・スミスに贈ると書かれた、印刷された予算書が、1878年に売却された」と書いている。これがカニンガム家の最初の売却であることは、いうまでもない。ところが、エディンバラ大学には、「〔財政〕総監テュルゴ氏からアダム・スミス氏へ」と書きこまれた『1776年3月12日の報告書』があり、シェルフ・マークが Dh. 7. 12なので、ホジスン蔵書からの寄贈とおもわれる。しかもこれは、ネッケールの『国王への会計報告書』とあわせて製本されているので、ボナー（あるいはカニンガム家からボ

ナーへの報告)が、ふたつのうちどれかを「予算書」とかんちがいしたのかもしれない。なお、スミスは、ジョン・シンクレアへの手紙で(1778年11月24日)、モロー・ドゥ・ボーモンの『ヨーロッパ租税論』について、「テルゴ氏の特別の配慮によって一部を入手した」と書いているけれども、この本は行方不明である。テルゴの『予算書』についての、ボナーの記述のあいまいさは、1878年の売却の内容を、かれが正確につかんでいないことを示すが、それでは、第2版の序文で、両家から「くわしい目録 full catalogues を入手していた」と書いたのは、なにを意味するのだろうか。「had received」となっていることからすれば、これは初版のときをさすものと解される。

3) Robert Davies, *A memoir of the York Press, with notices of authors, printers, and stationers, in the sixteenth, seventeenth, and eighteenth centuries*. Westminster 1868, p. 296.

4) ヴァイナーの情報も全面的に信用することはできない。p.22 注13)を見よ。

5) NUCによれば、議会図書館、ニューベリ図書館(シカゴ)、ミシガン大学図書館、コーネル大学図書館なども、初版をもっているらしい。しかし、NUCは、たしかにひじょうに便利ではあるが、版次、アクセントエディション、パンクチュエーションについては、信用できない。

6) W. Innes Addison, *The matriculation albums of the University of Glasgow from 1728 to 1858*, Glasgow 1913.

7) G. Chalmers, *An estimate of the comparative strength of Britain during the present and four preceding reigns.....*, London 1782, p.76.

8) Cf. Horst W. Drescher, *Themen und Formen des periodischen Essays im späten 18. Jahrhundert*, Frankfurt a. M., 1971 ドレッシャーの編集で、マッケンジーの評論集が出版されたはずだが、未着。H. W. Drescher (ed.), *The literary correspondence and notebooks of Henry Mackenzie, 1766-1827*. Vol. 1, Letters, Mainz 1989.

(名城大学商学部教授)

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 19*

発行所 東京都国立市中 2—1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1989 年 3 月 31 日

印刷所 東京都八王子市石川町 2951—9

三省堂印刷株式会社
